

REPORT

独立行政法人 国際協力機構（ジャイカ）

四国センター JICA徳島デスク

森陽子

JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテストより 「エシカル消費」への気づき

中学生・高校生エッセイコンテスト

JICAは、国際理解教育・開発教育支援事業の一環として、「中学生・高校生エッセイコンテスト」を開催しています。本コンテストを通じ、中学生・高校生を対象に開発途上国の現状や日本との関係について理解を深め、国際社会の中で日本、そして自分たち一人一人がどのように行動するべきかを考えていただく機会を提供しています。今回は、2019年度にJICA四国「国内機関長賞」を受賞した作品を紹介します。買い物先で「レインフォレスト・アライアンス認証」のシールがついたバナナを目にしたことから、生産国の環境、生産者について考えを巡らせ、「エシカル消費」に気づくきっかけを与えてくれる内容です。

生徒作品：「バナナでつながる私と世界」徳島文理中学校 1年（2019年度）近藤麻友

「この緑のカエル、何のマーク。」
私はスーパーの果物のコーナーで手に取ったバナナのパッケージについていたカエルマークが気になって、母に聞いた。

「レインフォレスト……。さあ、何だろうね。」

早速、帰ってから調べてみると、これはレインフォレスト・アライアンス認証マークというものだった。森林や生態系の保護、土壌や水資源の保全、労働環境の向上、労働者の生活保障などの基準を満たした農園に与えられるもので、その農園から供給された原料を使

用した製品につけることができるマークだと分かった。カエルがシンボルマークに選ばれた理由は、自然界の変化に最も敏感で、環境が悪化すると一番に絶滅するといわれていることからだそう。

つまり、カエルマークの付いたバナナを買うことで、私も生産国であるフィリピンの環境を守り、生産に携わる人達を助けることができるのだ。そんなことを全く知らず、当たり前のように私は毎朝バナナを食べていた。

これまで、私はバナナがどのようにして生産されているかを知ろうとしたことがなかった。しかし、調べてみると、そこにはバナナ産業の驚くような現実があった。日本で食べられているバナナの約八割を生産しているフィピン。その一部の地域では、森林を伐採して農園をつくり、栽培中には農薬を空中散布しているというのだ。



「毒の雨」と呼ばれている農薬の被害に、労働者をはじめ地域の人達は苦しんでいるが、貧困のため十分な医療を受けることができない。皮膚病を患う子供の写真には、あまりにもかわいそうで目を背けてしまった。当然、農薬は排水路を流れ、川や海、自給用作物や飲み水までも汚染している。しかし、その地域には他に仕事がなく、低賃金にもかかわらずそこで働くしかない。こんなことが許されているのだろうか。



森陽子

JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテストより 「エシカル消費」への気づき



いる。また、危険性の高い農薬の使用を削減し、労働者に対して農薬に関する安全研修をするなど、地域社会全体が農薬の危害にさらされないよう考えられている。さらに、労働者には公正な賃金が支払われ、安定した生活が保障されている。なかでも、労働者自身が現在から将来に渡って環境と生活を守っていくことの重要性を知り仕事に取り組むことができたことを私は本当に良かったと思う。

今日まで、私はバナナを買うことで人や環境を傷つけていたかもしれないと分かり、心が痛くなった。これからは、「誰が、どのようにして作ったものか」をよく意識しながら買い物をしようと思う。目印はカエルマーク。私の一歩は小さな一歩だけれど、この小さな積み重ねが大切なんだと思う。同じ思いを持つ人が増えれば、きっとすべての地域で生産の方法も変わるはずだ。世界の人達と環境のために、私はバナナ選びから始めよう。

その一方で、同じフィリピンのレインフォレスト・アライアンス認証バナナ農園では、水路に沿って植林をし、茎や葉を堆肥にするなど、土地の保護と回復に努めて



JICA四国センター小林所長から近藤麻友さんへ「国内機関長賞」を授与しました。



レインフォレスト・アライアンス
認証マーク

